

大分県 Oita Pref.(豊前 Buzen/豊後 Bungo)



くじゅう連山の星生山（ほっしょうざん）から

大分県では、西部にそびえる釈迦岳（別名：普賢岳）や御前岳、北部にそびえる英彦山（ひこさん）、中部にそびえるくじゅう連山や由布岳、鶴見岳、南部にそびえる祖母山などの山々から、空気が良く澄んだ日には“[北東面～東面の雲仙岳](#)”が眺望できます。中部や南部の山々からは、手前に[阿蘇の北外輪山](#)が横たわり、その奥に雲仙岳がぼっかりと現れます（↑）。

かつて中世の時代、南蛮船来航と共に九州にキリスト教が伝来した際、豊後領主の大友宗麟はいち早くキリスト教に理解を示し、1557年にはイエズス会のルイス・アルメイダに府内（大分市内）への病院設立を認めましたが、アルメイダは1563年には雲仙岳そびえる島原半島南端の口之津（西九州の交通上の要所）に入り、島原半島や長崎、天草での布教に努めました。大友宗麟は、1578年にはキリシタン大名となり、同じくキリシタン大名となった島原領主の有馬晴信らと共に、日本国内での布教の成果をローマ教皇へ示すため、雲仙岳南麓にあった有馬セナリヨの第一期生4名を“天正遣欧少年使節”としてローマへ派遣しました（1582～1590年）。また、1580年に府内に創設されたコレジョは、薩摩領主の島津氏の焼き討ちにあい、1590年に雲仙岳南麓の加津佐に移転しています。

江戸時代には、肥後熊本藩により豊後街道（大分市～竹田市～阿蘇カルデラ～熊本市）が開かれ、幕末に勝海舟・坂本龍馬の一行が江戸から長崎に出張した際には、この豊後街道を通り、有明海を渡って雲仙岳山麓の街道を通り、長崎に到達したとされています。

くじゅう連山と雲仙岳は、昭和9年に国立公園（阿蘇くじゅう、雲仙天草）として指定され（昭和28年には由布岳・鶴見岳も編入）、平成26年には80周年を迎えています。

由布岳・鶴見岳からくじゅう連山へと連なる火山の列は、西の方へ阿蘇山、金峰山、雲仙岳へと、概ね一直線上に並びます。火山ごとに地形・地質は異なりますが、春はピンクのミヤマキリシマ、夏は青い草原、秋は錦の紅葉、冬は白い霧氷と、九州ならではの四季の彩りを共有しています。昭和2年、この一帯を道路で結んで国立公園にする「九州一大国立公園構想案」を提案したのが、“別府観光の父”と呼ばれる油屋熊八氏で、別府～くじゅう～阿蘇～熊本～雲仙～長崎をつなぐルートは、昭和39年に九州横断道路（一部は“やまなみハイウェイ”）として完成し、阿蘇くじゅう・雲仙天草の国立公園を結んでいます。また、昭和55年には、九州各県をネックレスのようにつないで一周するトレイル“九州自然歩道”が開通し、くじゅう連山から遥か雲仙岳までトレイルは続いています。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、大分県を旅してみませんか？